廣瀬川

第77号
平成23年
8月1日

仙台市小学校長会　　発行者／久能　和夫（会長）　責任者／渡部　力（広報部長）

主張

教育の復興にかける思い
～多くの支援を受けて～

会長　久能　和夫（榴岡小学校）

３月11日，いまだ誰もが経験したことのない大地震，大津波に襲われ，子どもたちの安全確保と同時に数多くの避難者を受け入れた避難所の運営に奔走しているさなか，追い打ちをかけるように発生した原発事故。三重苦ともその後の風評による様々な問題を加え，四重苦とも言われる状況下に置かれた仙台市小学校長会に，全国の都道府県小学校長会及び指定都市小学校長会から続々と激励の言葉，お見舞いが送られてきた。全国各地から寄せられた「連帯の思い」は，大震災を乗り越え，教育の復興に立ち向かわなければならない私たちに大いなる勇気とエネルギーを与えてくださった。

４月下旬，仙台市の全ての小学校が再開し，子どもたちの元気な声が学校に戻ってきた。校長自らのそれまでの知恵をもってしてもその方向性を見いだしにくい難問に直面し，昼夜を問わず心血を注いできた私たちに，学校に戻った子どもの声は「学校本来の役割」を覚醒させてくれた。

震災復興元年の今年度，折しも小学校においては，新学習指導要領全面実施の年である。「確かな学力や豊かな心，健やかな身体の調和を重視する生きる力を育む」基本理念のもと，「新しい時代を拓き，心豊かにたくましく生きる日本人の育成」という観点から，より一層，質の高い教育を目指していくことが求められている。

今こそ，その実現のため，校長としての志を高く掲げ，非常事態であるが故にその機を逃さず，学校経営・運営の改善・改革に結び付けていきたい。避難所運営，学校再開へ向け，誇り高き使命感に支えられ誠実に取り組んでくれた教職員，さらには，災害時における地域の拠点としての学校の果たす役割の大きさ，信頼の度合いを高めてくれた保護者，地域住民の力を結集し，「復興へ！学校の力結集！」の旗印のもと，校長自らが先頭に立ち，リーダーシップを遺憾なく発揮し，より協働性の高い学校を創り上げていきたい。

学校における校長は唯一無二の存在である。しかし，組織として目を内と外に向けたとき，そこに互いに支え合う校長の存在を忘れてはならない。結成以来，営々と築き上げられてきた市校長会としての凝集性をさらに高め，各校長がもっている豊かな人間力を組織的に結集する「共助の精神」を生かし，変化に対応する「理念と指導性」が見える学校経営を創り上げ「仙台市小学校長会としてのアイデンティティーの確立」を目指したい。さらに，もう一つの大きな存在である，連携の手を差しのべていただいた，各都道府県・指定都市校長会の皆様からの復興にかける願いと期待をしっかりと受け止め，私たちのこれまでのそしてこれからの歩みを情報発信することを通して，その熱き支援に応えていきたい。

おもな内容

○主　　張 …… 1
○特集・震災「教育活動の再開に向けて」 … 2
○学区自慢「復興への強みここにあり」 …… 6
○提言「復興を担う学校教育」 …… 8
○退会者からのメッセージ …… 10
○編集後記 …… 16

特集・震災　教育活動の再開に向けて

再開，そして，再建・創造へ

荒浜小学校　川村　孝男

１　はじめに

荒浜小学校は，明治６年７月10日に設立。平成23年度で139年目を迎える仙台でも最も古い学校の一つ。仙台市の沿岸部に位置し，平坦な住宅街である。

２　地震や津波に対する取組

昨年一年間だけでも多様な取組がなされた。

(1)　地域あげての地震・津波避難訓練を６月12日に実施。避難場所は３，４階と設定していた。

(2)　２月のチリ地震津波の時には，七郷小学校へ移動させられるなど住民には不満があった。その後，荒浜小学校も正規の避難所と指定され，物資等が1.5倍に増強されていた。

(3)　津波時の避難所運営をテーマに，若林区学校技師研修会を荒浜小で行い，啓発活動をしていた。

(4)　体育館にあった毛布等を，津波対応として校舎３階の災害物資倉庫へ移動させた。（９月）

(5)　社会福祉協議会の指導の下，避難所運営シミュレーション活動を職員で行った。（１月）

(6)　指定動員職員と民生委員の合同会議（２月）を行い，避難ルート等について協議した。

３　地震当日の避難の様子

14時46分，地震とともに全て停電し，津波放送システムもダウンし，サイレンのみが作動。校長がハンドマイクで校庭，各教室を回り，帰りの用意をして４階の各教室に集合するよう指示。15時頃担任と共に全児童の移動完了。児童の保護者引き渡し開始。住民の避難を想定し，教室に町内会の名称を掲示するように指示。校長は，校庭で，教頭・教務が昇降口で住民の避難誘導開始。15時55分，津波襲来。校長が町内会長に避難所運営組織の編成を依頼。その後，自衛隊に救助されるまでの運営は，運営組織に一任。教職員は，児童の指導に専念。17時30分，屋上から児童がヘリコプターにて救出され始める。３月12日の５時までに児童71名の避難完了。同日18時最終ヘリコプターで校長，教頭等が救助される。

４　修了式，卒業式実施に向けて

(1)　児童の安否確認

救出段階で児童20名の安否が不明であった。そこで，①児童の安否確認と励まし　②保護者の安否の２つに絞り，避難所とおぼしきところに徒歩等で職員を巡回させ，情報収集にあたった。

(2)　３月22日から24日にかけて，カウンセラーによる全児童対象の診断的な面談を実施。

(3)　３月24日13時から修了式，卒業式を若林区役所６階のホールで行った。

５　再開に向けて

全ての課題が克服されたわけではないが，４月15日の保護者説明会を経て，東宮城野小で19日着任式・始業式，そして，入学式を実施。授業開始１か月後の５月20日，授業参観と父母教師会総会を実施。転出等で予定していた内定役員の欠員が相次ぎ，総会は異例づくめであったが，保護者の思いが伝わる大会であった。

６　子どもたちへの３つのケア

学校再開にあたっては，緊急に行う３つのケアが必要と保護者にも説明した。

(1)　心のケアについては，児童対象，保護者対象のアンケートを実施　SCの来校回数の倍増と増員

(2)　学習のケアについては，加配１名，神戸市教委指導主事派遣による個別指導の強化　宮教大生による避難所の学習支援も実施

(3)　生活のケアについては，担任による相談，宮教大生による話し相手，遊び相手活動

７　当面の課題

(1)　仮設住宅など保護者の激しい移動への対応

(2)　スクールバスの安定的な運用

(3)　保護者の経済的負担の軽減

(4)　荒浜地区の環境を生かした生活科，総合，社会科など一部カリキュラムの見直し

８　荒浜小の再建・創造

現在，地域そのものの再生の見通しがつかない。地域住民の営みが生まれてこそ，学校も生まれてくるのである。未曾有の災害の中，改めて「地域に支えられた学校」であったことに気付く。学校の再建，そして，創造もまた「地域と共に歩む」のである。

特集・震災　教育活動の再開に向けて

普段着の卒業式へ向けて

岡田小学校　遠藤　和彦

１　3.11　震災時の状況

その日は，登校時の不審者出現に対応するため，５校時限で教師引率の集団下校を予定し，保護者には一斉メールを送信していた。地震発生後余震が次々起きる中，校庭には児童を引き取りに来た保護者と避難してきた住民が集まり始めた。このような状況から，集団下校は保護者引き渡しに切り替えた。雪が降ってきたので，体育館に移動し引き渡しは続いた。その後，津波の襲来が伝えられ，引き渡しを中断し，体育館から校舎３階へ移動した。校舎には避難民が続々と集まった。校舎３階からは，七北田川を黒い津波が逆流して来るのが見えた。同時に南門から校庭へ津波が押し寄せたが，幸いなことに校舎内までは入ってこなかった。津波がひき，暗くなると，津波から逃れた人々が校庭に堆積した汚泥の中を歩き校舎内へ避難してきた。３月11日の避難者数は把握できなかったが，12日現在で723名が避難していた。

２　避難所への教職員のかかわり

⑴　３月11日夕刻，受け持ちの児童全てを保護者に引き渡した担任は職員室で待機し，避難者の対応にあたった。備蓄室からクラッカーを運び各教室の避難住民に配給するとともに，要所要所にストーブを配置。その後，男子職員は地域住民と共に近くのコミュニティセンターから毛布を運搬。

食事については，12日から地元の婦人防火クラブが中心となったため配給の手伝い程度のかかわりとなった。

⑵　３月14日午後，避難住民が町内会ごとに体育館に移動。その間，避難者数確認，ストーブへの灯油補給，食糧配給，支援物資の運搬，トイレの糞便の始末・清掃，プールからトイレ用水のくみ出し，電話対応，体育館整理等を避難者と協力し合いながら行った。

３　普段着の卒業式に向けて

⑴　避難所運営委員会の設置

12日夜，７町内会長が一堂に会し，運営委員会を組織した。この組織は７町内会全体で自治的に運営することとし，教職員は構成メンバーには入れなかった。施設管理責任者として，管理職が運営本部にかかわったのみである。早期の立ち上げにより，担任等の事務整理時間及び校舎内の清掃等の時間が確保された。

⑵　避難所受付の設置

テレビ取材の後，職員室へは昼夜を分かたず安否確認の電話が鳴り，その対応に職員が忙殺されていた。そのため，16日から，１階和室に避難所受付を設置。避難者情報の提供，マスコミ対応，支援物資の受入・仕分け，支援ボランティア仕分け等の仕事を行ってもらった。

⑶　校舎・校地の使用制限区域の設定

24日の児童登校までに，校舎内の消毒・清掃を徹底して行うため，避難所としての使用制限区域を明確にし，土足厳禁とした。それは，避難所の長期化を考慮し，避難者や来校者等と児童の動線の交差を最小限にする意味もあった。貸与した教室等は７室。保健室は児童対応専用とし，避難所には救護所を設置した。

⑷　災害時優先電話の設置

体育館へ向かう通路に電話が５台設置され，だれでも無料で使用できた。職員が，この電話を利用し，津波到来前に引き渡した児童の安否確認や修了式・卒業式の連絡を行った。

⑸　卒業式会場準備

22日から会場準備。学校から約１㎞離れた地区の集会所を整理し，丸椅子が並べられた。集会所に入れない保護者のため，窓の外にはテントで風よけされたひな壇を設けた。

４　普段着の卒業式

ぶっつけ本番の，児童も保護者も普段着の卒業式。55名の児童一人一人が自分の夢を述べ，笑顔で巣立っていった。

５　おわりに

本校の避難所は６月10日夕方閉鎖となった。児童の安全・学校再開をいつも気にかけてくれた運営委員会・避難所入所者の皆様に感謝。

特集・震災　教育活動の再開に向けて

東日本大震災後の教育活動再開に向けて

南光台小学校　飯塚　　巖

平成23年度４月８日，通常であれば始業式，入学式の日である。768名の児童が揃うはずだった。

本校は，東日本大震災の被害を受け，既存の校舎，体育館は危険で使用できない状況になった。また，校庭，校地内には地割れがあり立入禁止となった。

これを受け，早急に近隣の南光台中学校長と相談し，南光台中，南光台コミュニティセンター（以下コミセン），南光台児童館の３施設に間借りをして学校再開の準備を進めた。ところが，４月７日の余震で南光台中学校の一部が使用できなくなり，八乙女中学校にも間借りすることになり，４施設に分散して教育活動を再開することになった。

移動先	学年	学級数	児童数
ｺﾐｭﾆﾃｨｾﾝﾀｰﾎｰﾙ 和室	第１学年 第２学年	４学級 ２学級	１２８名 ６９名
南光台児童館	第２学年	２学級	６８名
南光台中学校	第３，４学年 特別支援	７学級 ２学級	２４７名 ９名
八乙女中学校	第５，６学年	７学級	２４７名

◆　経過

３月11日（金）地震発生　M9.0　震度６弱
- 校庭避難（２～６年）　安否確認（１年）
- 体育館は土台，階段，外壁等に亀裂有り，床が沈下，余震がなくとも絶えず微弱に揺れる
- 避難所開設は不可と判断
- 地域避難者を外体育倉庫へ誘導
- コミセンと南光台中避難所開設→避難者移動
- 児童引き渡し　　雪，気温の低下のため体育館で保護者の迎えを待つ

３月12日（土）～校庭に給水所開設
３月17，18日　家庭訪問（安否確認，予定通知）
３月21日（月）校舎・体育館使用不可の通知受信
３月24日（木）本校校庭で修了式
- 保護者へ校舎・体育館の使用不可を通知
- 南光台中，コミセン，児童館の３か所を使用しての授業再開を決定

３月25日（金）南光台コミセンでの卒業式
３月29日（火）本校校庭での離任式
- 保護者へ南光台中，コミセン，児童館の３か所を使用し，15日に始業式の予定を通知

４月７日（木）引越日の決定（13日・14日）
- 引越物品移動リスト作成

23:32 地震発生　M7.1　震度６強

４月８日（金）南光台中学校　余震被害のため校舎一部と体育館使用不可
- 昼　八乙女中学校に間借りの依頼をする
- 夕　12教室の提供を受ける
  ＰＴＡと協議　５，６年生の利用決定
- 夜　八乙女中から使用不可の連絡を受ける

４月９日（土）八乙女中校長，施設課，業者等と現地調査，検証
- 夕　８教室使用可の連絡を受ける

４月11日（月）八乙女中（５，６年）使用確定
４月13日（水）14日（木）４か所への引越
４月15日（金）本校校庭での始業式
　　コミセンでの入学式
４月18日（月）登校開始　授業再開
４月25日（月）簡易給食開始
５月21日（土）本校校庭での運動会
５月23日（月）２年生　南光台中へ引越
６月３日（金）４年生が体育館から武道館へ引越

◆　課題・配慮事項
- **全校児童が一同に会したのは運動会当日のみ**
- 武道館，コミセンホール使用教室の環境整備
- 給食配膳のための環境整備
- 全職員が集まるのは週に１，２回の打合せのみ
- 電話，校内ＬＡＮの整備
- 児童への配布物，全職員連絡時の対応
- 保護者からの連絡（欠席連絡，担任への連絡，問い合わせ等）
- 保健室利用者への対応，各種検診業務
- 中学校，使用施設との連絡調整

特集・震災　教育活動の再開に向けて

多くの方々に感謝の気持ちをもって

将監西小学校　堀米　千鶴子

前佐々木校長先生から「西小学校は，震災による被害が大きく，校舎への立ち入りが禁止となり，修了式も卒業式も学校近隣にある将監西コミュニティセンターで行いました。」という話を受けました。続いて，「授業再開は，近隣の小・中学校に間借りして行うことになるだろう。将監小学校の校舎も同様であるため，将監中学校，将監小学校，将監中央小学校，桂小学校，将監西小学校の校長・教頭が一同に会して話合いをする予定。」という連絡が入りました。大地震は，沿岸部をはじめ仙台市内の多くの学校に爪跡を残しましたが，将監西小学校の被害は，これまでわたしが経験したことのない，子どもたちが自分の学校で授業を受けることができないという大きなものだったのです。

幸いにも，将監西小学校は，全校そろって桂小学校で学べることになりました。４月１日の赴任のあいさつで，「将監西小学校は，桂小学校に間借りして授業を再開することになりました。西小の子どものいるところ，西小の教育活動を進めるところが将監西小学校です。西小の校歌は『われらは　将監西小学校！』というシュプレヒコールで始まります。校歌を歌えば，子どもたち自身，自分たちは西小っ子であるという気持ちをしっかりともつことができます。校歌はどこでも歌えます。子どもたちも私たち教職員も共に下を向かず，明るく頑張っていきましょう。」と話しました。将監西小学校の校舎に入れなくとも，教職員が笑顔でしっかりと教育活動を進めることができれば，子どもたちの笑顔を取り戻すことができると考えていました。

桂小学校の伊藤校長先生はじめ先生方は，将監西小の子どもたちが「肩身の狭い」思いをして過ごすことがないようにと，心を尽くして迎え入れの準備をしてくださっていました。一つの校舎に二つの学校が存在するという経験はないのだから，この機会をプラスにしていこう。子どもたちの「共助」の力を養い，生きる力を育んでいこうと両校が交流できる土壌を作ってくださっていました。桂小の子どもたちも笑顔で待っていてくれました。

４月の課題は，子どもたちの落ち着いた日常，学校生活を創り出すことでした。まずは，登下校時の安全を確保し，子どもたちが安心して通ってくることができるよう力を入れました。桂小学校は隣の団地にある学校です。団地と団地の間にある道路は登校時間には交通量が多く，自転車通学の高校生や大学生も多いのです。朝は，ＰＴＡの協力もいただきながら，要所要所に職員を配置して安全指導を行いました。下校時は，学年ごとに将監団地内まで引率するようにしました。登校時から下校時まで見守られているという安心感からか，入学したばかりの１年生も入学してから１か月間の欠席はゼロでした。うれしいことに，休み時間の校庭では，桂小の子ども，西小の子どもが共に，にぎやかに遊ぶようになり，授業そして校庭での遊びと学校の生活リズムが生まれ，子どもたちの日常が返ってきました。

５月の課題は，将監西小学校としての教育活動を着実に進めていくことでした。４月以来，交流を大事にしながらも，それぞれの教育活動がスムースに進められるよう，両校校長，教頭，教務間では毎日のように調整が行われました。体育主任や特別活動担当などの教職員間でも情報交換がなされ，校舎や校庭使用の約束は違っても，子どもたちの生活は，将監西小学校の校舎で生活するのと変わらぬ生活ができるようになりました。やれるかどうか子どもたちが心配していた運動会も，例年と変わらぬ時期の５月21日（土）に，桂小学校の校庭で開催することができました。声高らかに「われらは　将監西小学校！」と校歌を歌い，はつらつと西小っ子のたくましさを披露することができました。子どもたち，保護者，地域の方々，教職員が共に『運動会ができる』という喜びをかみしめました。

２校が一つの校舎で過ごす生活が，共生社会を築く担い手である子どもたちにとって，よりよい経験になるよう，これからも感謝の気持ちをもたせ交流を進めていきたいと考えています。

学区自慢　　復興への強みここにあり

地域との連携

高森東小学校　小野寺　和幸

本校が位置する泉パークタウンは,「住宅団地と工業流通団地，さらにスポーツ・レジャー施設と実に壮大雄図な総合的大団地造成開発で，おそらく本邦有数の大規模団地開発」（泉市誌より）と称され，今なお開発途上の団地です。団地内には計画的に緑地公園が整備されています。また，街路には木蓮や百日紅などの木々が植えられ，季節に応じた美しい花を咲かせ，人々を和ませてくれます。

泉パークタウン内には，私立も含め小・中学校は８校,さらには４つの児童センター，３つの市民センターがあります。これらの学校と各公所間の連携を深めるため，いくつかの組織が設けられています。その中の２つをここで紹介します。

はじめに紹介するのは，その中でも最大規模な連絡会「８校交流会」です。８校とは，泉パークタウン内にある公立小中学校６校と私立小中学校２校です。会には各校の校長とＰＴＡ役員が参加します。情報交換の機会の少ないＰＴＡ活動についても話題が及び，各校のＰＴＡ活動に大いなる示唆を与えています。

次に紹介するのは「７者連絡会」です。この会は，高森地区の３校の小中学校と私立幼稚園１園，２つの児童センターと市民センターを交えた連絡会で，年２回開催しています。普段から７者は頻繁に顔を合わせているのですが，こうして一堂に会することは貴重なものとなっており,特に今年度から高森小，高森中，本校の３校で共通目標を設定し，高森地区全体で協働型学校評価を活用した実践を進めようとする際の力強い応援団になっています。まさに地域とともに歩む学校づくりの鍵を握っている組織だと思っています。

昭和47年から開発された泉パークタウンも間もなく不惑の年を迎えます。人と自然が調和した団地は人々に安らぎと優しさを育み，諸機関との強固な結びつきを育ててきました。

学校はこうした人々や環境に支えられてこそ，子どもたちの伸びやかな生活の場を保障できているのだと，改めて考えさせられます。

学区自慢　　復興への強みここにあり

歴史と自然と人と

小松島小学校　針持　哲郎

雨も降れ　風の吹くをも厭はねど
今宵一夜は露無の里

これは今から800年ほど前,源頼朝の奥州討伐から落ち行く藤原忠衡の姫「小萩」が小松島の地に辿り着いた際に詠んだ歌といわれています。「露無」は，現在でも町内会の名として残されています。同様に，昭和10年頃に土井晩翠の持ち山を高級宅地として大規模に区画・開発した団地「長命荘」も，町内会名として今なお残っています。

本校の学区は，仙台駅から３km 足らずにありながら，北側の高松山を中心に，東の与平沼公園から西の小松島公園，そして瞑想の松まで東西に里山が伸び，今でも多くの緑や水辺が残っています。また，関ヶ原の戦いから50年ほど後に創建された東照宮が,学校の西側に深い木立に包まれて建っています。大正時代には，通町と中新田を結ぶ軽便鉄道が学校の西側に沿って走り始め，少し遅れて仙山線も学区の南端を通って作並まで開業しています。

学区の中には幼稚園や保育所，高等学校や大学があり，数年後には特別支援学校も開校する予定で，文教地区としての顔も持っています。その一方で学区内に中学校がなく，卒業生は３校に分かれて進学しています。したがって職員やＰＴＡは，三つの中学校とそこにかかわる六つの小学校とともに子どもたちの地域での生活を支えていくことになり，自ずと連携の広がりがもたらされています。

また，学区内にはキリスト教育児院が経営する児童福祉施設が四つあり，親元を離れて暮らす子どもたちが60人余り本校に通ってきています。そこには，多くの地域の方々がボランティアとしてかかわっておられ，地域の温かさを感じます。今回の震災でも３日後には町内会を中心に組織化された避難所運営が開始され，学校では児童の安否確認や心のケア，授業再開に向けた準備などに専念することができたのでした。

こうした豊かな歴史と自然と人々に囲まれ，小松島小学校は３年後には還暦を迎えます。

学区自慢　　復興への強みここにあり

城あとに　緑は萌えて

松森小学校　唐沢　　清

七北田の東に位置する松森地区には，地元の方が鶴が城（松森城址）と呼ぶ小高い丘があり，前には田畑が広がっています。鶴が丘ニュータウンの造成により児童数が増加し，昭和53年４月七北田小学校から分離開校しました。そして，地元の方々の熱い思いで松森小学校と名前がつきました。

一時期1170名の児童がいたのですが，開校後10年の間に鶴が丘小学校，松陵小学校が開校し，今は11学級263名になっています。

以前から住んでいる方々と新しい団地に住むようになった方々との交流もあり，落ち着いた雰囲気があります。地域の方々の熱い思いは，学校の敷地内の至るところに見られますが，その中から「全校田植え」と「ふれあい広場」を紹介します。

１年生と６年生がペアを作り，田んぼに行きます。地元の方に田植えの説明を聞いた後，実習です。６年生が苗の持ち方や植え方を１年生に教えます。

地元の方を講師にして，地元の田んぼで，地元の方々のお力を借りて，全校児童が共通の体験・田植えができるのです。収穫の秋には，５年生が鎌を持って稲刈りをします。サクサクと切れる感覚を楽しむ子もいます。そして，12月にはお世話になった方々を招待し，感謝の会を開きます。

また，20年近くも続いている「ふれあい広場」というものがあります。ねらいは，次の３つです。①学校・家庭・地域が連携協力し，ふれあいの場を持つ。②体験的活動を通し，ふるさとへの帰属意識を高める。③行事を通して児童・保護者・学校・地域の交流を深めＰＴＡ活動をより身近なものにする。

主催はＰＴＡですが，子ども会育成会，学区体振，社会学級，各老人会，松森青年会，鶴が丘児童センター……等，様々な協賛団体があり，まさに地域ぐるみのイベントになっています。

子どもたちに楽しい思い出をたくさん体験させたいという思いが，当地区にはあります。子どもたちは明るく素直で，自然に恵まれた環境の中でのびのびと育っています。子どもたちを取り巻く人的環境も良好です。これが我が校の自慢です。

学区自慢　　復興への強みここにあり

大仙台の若林

若林小学校　河原木　美智也

若林小学校の学区は，藩主伊達政宗が隠居所として使用していた若林城（現宮城刑務所）の南側一帯に広がる東西に長い地域である。かつては広々とした畑地だったが，現在ではほとんどが住宅地となり，集合住宅等も急増し，都市化が進んでいる。

学区の東部は国道４号線仙台バイパスが南北に縦断して走り，東西には拡張整備工事がひとまず終了し，装いを新たにした井土浜街道が走っている。学校の南側には清流「広瀬川」が流れている。

学校周辺には幼稚園・老人憩いの家・市民センター・児童館・広瀬川河川公園等の施設があり，幼児からお年寄りに至るまで，生涯教育の場としての「若林」というすばらしい地域社会となっている。

若林小学校は，「大仙台の若林，ゆかりの城の名どころに」という校歌の歌詞にもあるように，藩祖伊達政宗公以来，歴史的に由緒ある若林の地に，第30番目の学校として開校した。

４つに分かれた屋上をもつ校舎の外観は，豪華客船を連想させると評判である。また，7コースあるプールには，災害対策用小型創水機が付属している。

これまで，学校給食，花壇・緑化コンクール，ＪＲＣ活動，感動作文コンクール等で優秀賞等を数多く受賞している。

最近の特徴的な取組としては，毎月実施の家庭学習週間，生活習慣定着のための生活リズム向上のススメ，ＪＲＣ活動，児童会によるあいさつ運動や若竹遊び集会，学区民大運動会，全校で取り組んでいる体力づくりなどである。

児童の特徴としては，不登校児童がいないこと，日々の欠席者数が極めて少ないこと，校庭で遊ぶ児童が多いことなどがあげられる。学校が大好き，笑顔で元気な児童ばかりの小学校である。

最後に特筆しなければならないことは，この「若林」に住む人々の学校に対する協力が，学校の創立と発展に偉大な力を発揮してきたことである。「おらが学校」という美しい伝統が，今もなお生き続けている。地域から愛され信頼され続けてきた学校。地域の方々の協力・支援があればこそなのである。

提言
復興を担う学校教育

「安全教育」と「危機教育」

１地区会長　髙橋　享治（向山小学校）

「ここ避難所になっていますよね。」

３月11日，校庭で児童を保護者に引き渡しをしている最中に地域の方と思われる若い女性がやってきた。そして，体育館へ向かっていった。避難のため次々といろんな人がやって来る。子どもはまだ校庭に残っている。余震も心配である。

「対応が間に合わない……」と思いながら職員に指示を出していた。あせりばかりが先行する。

学校安全マニュアルがあっても，そのとおりにいくのは避難訓練の時だけであって，実際の災害が発生した時にどのように対応したらよいかは，その時の状況によって大きく変わるのではないかと思う。

もちろん，いろいろなケースを想定して指導や訓練をするわけだが，そのような時，目にしたのが「安全教育」から「危機教育」へという言葉であった。（「内外教育」５月号）

危機管理マニュアルを見直すことも大切であると思うが，それが生きて役に立たないときがあるのではないだろうか。

大事なことはどんな状況になっても自ら判断して対処できる「危機教育」が，これからは必要であると本書では提言している。

３.11の震災で失ったものはあまりにも大きい。しかし，逆に子どもたちが学んだこともたくさんあったのではないかと思っている。将来の日本を背負って立つ子どもたちの貴重な体験になればと思う。

東部自動車道路の東側を一部ではあるが見て回った。「唖然として言葉がでない」というのが実感であった。１週間や10日間ぐらいの我慢の生活がなんと小さい事だったのかを思い知らされた。

実際に自分が危機にさらされた時に自分で生きていく力，判断する力，対処する力を，学校のみならずいろいろな機会に普段から身に付けていけるようにしなければならないと思った。明日は我が身となるかもしれない。本当の「生きる力」というのはこういうことではないだろうか。誤った判断をくださないためにも肝に銘じたいことである。

提言
復興を担う学校教育

復興は学級経営の充実から

２地区会長　白幡　守雄（貝森小学校）

３月11日に発生した大きな地震と津波により，仙台市内の各学校でも大小の差はありますが被害を受けました。小学校生活の節目である卒業式の直前でした。

震災後，各学校で状況は違っていても今できる最大限の最高の卒業式を挙行したに違いありません。教師，保護者や地域，子どもたちの思いや願いが一つになり，卒業生の緊張した表情の中，卒業証書を受け取り元気に巣立っていく姿を見送れたことは，すばらしいことであり感動的でした。大震災の時だからだけでなく，人生の節目としての卒業式の意義について，改めて考えさせられた学校行事でした。

復興に向けて，本校では「歌，花，笑顔」を今年度のテーマとしています。新年度になり登校してきた時の子どもたちのうれしそうな笑顔が印象的でした。やはり学校は，子どもたちの元気な声と笑顔が似合います。でも，余震が続き子どもたちの心の不安は簡単には消えないと思います。元気を出してこれからの時代に向かっていけるように，心の励みとして「歌，花，笑顔」をテーマに取り組んでいます。

歌「毎日学級で朝の会や帰りの会時の歌，音楽朝会や学芸会などの全校合唱」
花「玄関や校門の回りのプランター，学級園などでＰＴＡと共に明るい花の栽培活動」
読み聞かせ「毎週水曜日ボランティアの皆さんと担任で全学年で実施」
笑顔「学校，家庭，地域一緒になって取り組む元気で明るいあいさつ」

しかし，これらの活動や復興プロジェクト，学校行事等を推進する上で学級経営が基盤になると思います。教師が子どもと向き合い，話し合い，子どもに寄り添い，子ども同士励まし助け合える学級経営を構築し，教師と子どもが心一つとなり一緒に取り組むことが重要です。復興は学級経営から始まるとも言えるのではないでしょうか。

また，地域の皆様と大震災を振り返り反省と今後について話し合いをもつ予定です。今まで以上に地域，保護者の皆様と連携し話し合い，復興に向けて教育活動に取り組む大切さと必要性を感じています。

提言
復興を担う学校教育

震災後の復興を担う学校教育

３地区会長　大谷　義昭（荒巻小学校）

３月11日の東日本大震災は，千年に一度といわれる未曾有の災害をもたらした。本校では，教職員，児童，保護者に，死傷者がなかったことが幸いだった。

本校では３月11日から27日までの17日間にわたり避難所を開設した。最も多いときで１日に約450名の方が避難された。この間，本校教職員は，自分の家族の安否確認を気にしながらも，避難所運営のために，まさに獅子奮迅の働きをみせた。

しかし，防災計画について，地域と十分な打合せをする前にこの度の災害に直面したため，様々な問題点が明らかになった。その一つ一つを記載するだけの紙面上のゆとりがないので省略する。

５月には，荒巻地区連合町内会，ＰＴＡ，民生委員の皆様に集まっていただき，荒巻においておそらくは初めてとなる地域防災会議を，本校で開催したところである。

復興を担う学校教育においては，今後中心的な役割を担う次世代の人材育成を図ることが急務であると考える。 従来の「防災教育」に加え，この度の震災により多面的な視点から得られた教訓を学び直し，今後の復興につなげていくための指導内容を考えることが重要である。また，その認識を教職員，保護者，地域住民と共有していくことが不可欠である。

例えば，復興に係る指導の具体として，理科では「地震や津波が発生するメカニズム」，社会科では「宮城県・仙台市の地震や津波被害の歴史」，「災害に強い今後の街づくりについて」，道徳や総合的な学習の時間では「生命尊重」や「ボランティア活動（精神）の大切さ」等が考えられる。

目下，新しい防災計画の作成とともに，これらのことをカリキュラムにしっかりと位置づけ，実践できるような取組の在り方について検討しているところである。

提言
復興を担う学校教育

東日本大震災に学ぶ

４地区会長　菅原　恭徳（泉ヶ丘小学校）

平成23年３月11日，この東北・東日本を突然襲った大震災は，多くの命と生活の基盤を一瞬にして飲み込んでしまうという未曾有の被害をもたらし，人々に深い傷と喪失感を与えた。

そのような折，困難な状況において，連帯感を強め，個より公を優先して，秩序と礼節を守りながら，自らの力で立ち上がろうとする日本人の精神的気質を称賛する海外からのメッセージに注目したい。パニックや暴動に繋がりかねない状況下においても，冷静で強靱な精神力により，黙々と耐え忍び，街を再建しようとしている被災地の人々の姿に感銘を受け，日本を応援し，日本人の行動を称賛するメッセージである。

震災後よく耳にするのは，「想定外」という言葉である。この言葉は，その時その時点における人間の力の限界を示すものである。しかし，日本そして日本人は，長い歴史の中で，何度となくこの想定外の出来事を経験し，一つ一つ克服しながら，日本の文化を発展させてきたのである。戦後のどん底からも，世界が驚くほどの復興を成し遂げてきたのである。その原動力は，なんと言っても，日本人のもつ連帯感と精神的気質であろう。そして，我が先人たちは，敗北や不幸を発展への契機とし，志を失わず夢や希望を持ち続けることの大切さを教え伝えて来たのである。

今，私たちは，この度の東日本大震災から何を学び，何を伝えなければいけないのか。これからの学校教育において，何を大切にしなければいけないのか。この問いに対する答えは，自ずと見えてくるような気がする。

今，私たちが生かされていることへの感謝や命の尊さ，そして，互いに支え合うことや人と人との「絆」の大切さを通し，日本人としての精神的美徳である個より公を大切にする文化の継承に努めなければならないだろう。

また，どんな困難な時でも決して諦めず，夢や目標に向かって努力し続けることの大切さを教えていくことが大切であろう。